

ピアサポートのエートス

－何を生み出すことを意図するのか－

○東北福祉大学 黒田 文 (002095)

キーワード：ピアサポート、当事者、サービス消費者、リカバリー

1. 研究目的

精神障がい者に対する支援では当事者がサービスの提供者となるピアサポート活動が拡がり、当事者支援のあり方が模索されている（大島, 2013）。ピアサポート活動の中核は相互扶助性と理解されるが、セルフヘルプ・グループも含めてその歴史は長い（Katz 1967, Segal 2013）。本報告では、精神障がいの領域を中心にピアサポート活動がどのように変化してきたかに注目し、その系譜を理解・共有するための整理と考察を行う。

2. 研究の視点および方法

ピアサポート活動の歴史を取り挙げた国内の学術論文を収集した後、巻末の引用・参考文献をもとに主要な第一次資料を選定した。第一次資料の書見を通じて巻末文献を再収集することを繰り返し、主たる資料を追加した。それらの資料をもとに特に国外のピアサポート活動の変遷について整理し、ピアサポート活動が何を目指し、どのような取り組みを行ってきたのかについて整理・考察した。以下の研究結果で示すように、変遷については主に3つの流れに整理した。

3. 倫理的配慮

本研究に際しては、日本社会福祉学会研究倫理指針を遵守した。

4. 研究結果

1) アドボカシー運動とセルフヘルプグループ

精神障がい領域で最も初期のピアサポート活動の一つには、1845年に英国で組織された The Alleged Lunatics' Friend Society のアドボカシー運動がある（Hervey, 1986）。この運動では、同年に制定された心神喪失者法（Lunacy Act）で監禁や厳しい処遇を受けた当事者が結束し、その過酷な処遇や不適切な手続きの実態を公けにした。その目的は、精神障がい者に対する理解と処遇改善である。同法がいかに人権を無視した劣悪な処遇を行っているかを詳らかにするため、約70名の精神障がい者ケースを取り上げ、精神疾患のある者が処遇過程で適切に法的サービスを利用し、人権を守ることができるように改善を求めた。弁明の余地なく精神障がい者を強制的に入院させるのではなく、当事者の主張を聴く過程と法的手続きが必要であり、同時に当事者理解を促すためのしくみをつくることを目的としたが、結果的に当時の社会では確実な理解をえることなく沈静化している（Hervey, 1986）。

他方、米国では1840年にアルコール依存症に苦しむ当事者によって Washington Temperance Society が設立され、まず、依存症者の生活を明らかにすることで彼らが置かれる状況に対する理解とピア（家族を含む）のサポートをよびかける活動が始められた（Edwards, Marchall & Cook, 2003）。その活動は、依存症に苦しむ人の困難の内容を多くの人に理解してもらうこと、同様の問題を抱える当事者が互いに支え合うことを目指していた。上記の活動では、精神障がい者の生活状況やその処遇

について社会の人に多くを知ってもらうことが大きな焦点となっていた。続いて米国では、1935年にAA (Alcoholic Anonymous) のセルフヘルプグループが設立される。このグループでは定められたプログラムを実施して活動内容を組織化（構造化）し、個々人の内面を変化させることに主眼が置かれている。AAは、精神疾患を抱える者が自分の生活を変えるためには、必ずしも専門職に頼らなくてもよく、経験を共有できる者同士のサポートがあれば生活を変えられるという考えを広めた。AAによって、当事者がお互いのサポートにより自分の生活を変化させる方法や方向性が打ち出されるが、この時の当事者意識や関心の中には政治的な文脈は強く反映されていない。

2) サービス消費者／苦難を逃れた者(consumer/survivor)として

1960年代末に胎動した市民権運動と出会うことで、精神障がい当事者活動に新たな文脈が取り入れられる。米国の市民権運動が女性解放運動や同性愛者の権利を要求する社会変革的運動へ広がりを見せていくなか、抑圧された立場にある者が経験する苦難が共通基盤となり、精神障がい当事者も社会に対して正義と権利を強く主張し（Chamberlin, 1978）、従来精神医学的政策に懐疑を深めている（Mead, Hilton, & Curtis 2001）。精神疾患をもつ者が認識したのは、自分達が経験する問題にはラベリングに代表されるような社会的／政治的な文脈が強く影響されており、社会の中で自分たちがいかに軽んじられた存在になっているか、「精神異常」という烙印により自分たちが患者という社会役割を担い、抑圧的な社会条件下で回復力を奪われていたことへの自覚を深める（Chamberlin, 1978）。当事者が啓発したのは、自分たちの問題は精神医学モデルによって生理学的問題に閉じ込められ、医療専門職者に処置されなければならないという思考に閉じ込められていることである（Zinman and Harp 1987）。患者役割から脱するにはピアサポートが必要であることが強く意識され、医学モデル脱却を目指してリカバリーという概念が積極的に取り入れられるようになった。

3) 契約／雇用される者としてのポジショニング

リカバリーする／にある当事者の持ち味をいかし、ピアがサービス提供者として新しい立ち位置を獲得していく時期である。訓練を受けた者がピアとして精神保健福祉サービスを利用している精神障がい者を支援するシステムが精神保健システムのなかで導入・制度化されていく。当事者であると同時にサービス提供者にもなりうることで、「サービスの提供者であること」と「障がいを抱える当事者であること」の立ち位置や役割分担について模索が続いており、ソーシャルワーカーにとっても、彼ら／彼女の活動とどう向き合うのかが問われている。

5. 考察

ピアサポート活動は当事者が取り組んできた相互扶助・社会変革の形態であり、時代の影響を受けながら編み出した彼らの価値や原則が色濃く内包されている。専門援助者はその足跡 - 当事者が作り上げてきたしくみ - にどう向き合うのか、ピアサポートを活かすとはどういうことか、それらの問いはピアサポートのあり方が注目されるからこそ改めて真摯に向き合うべき内容だと考える。当事者が繋いできたピアサポート活動の文脈を無視しないためには、そのエートスを理解する作業が専門援助者には不可欠だと考える。*参考文献については発表時に提示する。